ID注1)	251103	公開ﾚﾍﾞﾙ注1)	C	保管形式注1)	電子	保管場所注1)		前回ID	241103

報告書名称/調査名称	令和６年度　世界遺産白神山地ブナ林モニタリング調査	発行年月/報告年月	2025年 10月
		資料形式注2)	—
調査機関	世界遺産白神山地ブナ林モニタリング調査会・環境省東北地方環境事務所	委託機関	
調査開始年	1999年 6月	調査期間	2021年 6月 ～ 2024年 11月
調査頻度注2)	毎年 — —	調査時期注2)	春 夏 秋
ﾓﾆﾀﾘﾝｸﾞ計画	2022年7月　策定	区分注2)	ⅡA　大区分注2) 1　小区分注2) (1)

調査箇所・範囲注3)

☑ 核心地域　☐ 緩衝地域　☐ 周辺地域

☑ GPS等の位置データあり

※周辺地域における調査箇所は備考欄に示す。

調査手法

□調査項目
　ブナ林動態調査
□調査箇所数
　遺産地域内３箇所（ヤナダキサイト、クマゲラサイト、尾根サイト）
□調査面積
　サイト毎に100m×１００m
□調査手法
　種子・リター調査以外は年１回実施、種子・リター調査は6月にリタートラップを設置し7～11月リター回収、11月リタートラップ撤収。
※平成27年度に関しては道路状況・天候不順の影響でリタートラップの設置を9月に行い、10月～11月にリターの回収を実施した。それ以外の調査項目に関しては例年通りに実施
〈成木〉・・・胸高直径 5cm 以上の樹木を対象
胸高直径、位置
〈低木〉・・・樹高 50cm 以上、2m×5m 枠×10 個/サイト
樹高、地際直径
〈ササ〉・・・2m×5m 枠×10 個/サイト
稈長、地際直径（新規のみ） 生死、群落高
〈実生〉・・・高さ 50cm 未満、1m×1m 枠×40 個/サイト
樹種、生死、高さ
〈種子・リター〉・・・0.5 ㎡のリタートラップ×20 個/サイト
1 か月ごとに回収、仕分け
種子数（状態：未熟、虫食い、しいな、健全）、リター量
〈光条件〉・・・全天写真
実生枠（1m×2m）につき一地点、地表、ササの上（2m）

結果概要（スペースに収まるように入力してください）

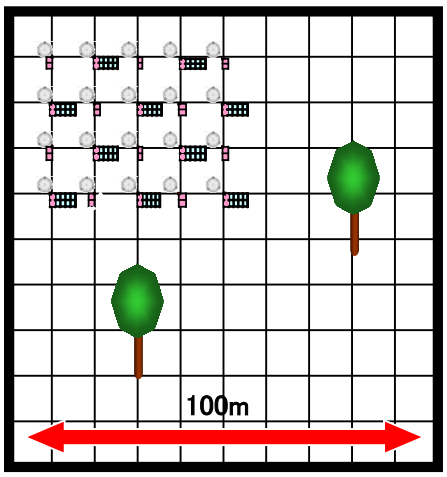
〈ブナ林〉
3サイトとも典型的な日本海側のブナ林の特徴を示していた。クマゲラサイトの半分は地すべり跡地にあり、胸高直径最大約 60cm でサイズのそろったブナが多く、一斉に成立したことを示唆する。尾根サイトでは、最大 120cm にもおよぶ大径のブナがある一方、過去の倒木によって林冠ギャップとなった部分も多いため、小径の樹木密度が非常に高い分布となっている。ヤナダキサイトのブナ林は典型的なブナ原生林の構造といえる。 2018年は台風21号の影響でマザーツリーが折れるなど、被害は他年に比べると大きかったと思われるが、プロット内では明確な影響は見られなかった。
〈低木ササ〉
いずれの調査区でも、オオバクロモジ、オオカメノキ、タムシバといった低木性樹種が大部分を占めている。低木ではどのサイトでも、2006 年から増加傾向を示している。ササについては尾根サイトで2006 年から増加傾向を示している。
これは、2004年および 2005 年にこの地方を通過した台風により、林冠木が倒れ、林冠ギャップが形成されたことと対応している。(図なし)
〈ブナ種子〉
2024年は、前年が欠測であったため２年ぶりの調査となった。各サイトとも豊作傾向を示し、尾根サイトでは健全種子704個/m²、クマゲラサイト490個/m²、ヤナダキサイト574個/m²と、いずれのサイトも過去25年間で突出して高く、2000年以来の大豊作年となった。虫食やしいなも一定数みられたが、健全種子の割合が高かった。
〈実生〉
各サイトともブナの豊作年の翌 2001年に密度が最大となったが、大量に加入したブナ実生も、1～2年でほとんどが消失し実生密度の増加はごく一時的なものにとどまった。2014年は2013年に健全種子が落下したため、当年生のブナ実生が3サイト平均0.87個/m2に増加した。２０２２年、２０２３年は、サイトへのアクセス道が通行止めになったため実生の調査は中止した。

世界遺産白神山地ブナ林モニタリング調査会
石橋史朗
office@monitoring.sakura.ne.jp

≪原本（データ）の帰属について≫

注1)　「ＩＤ」「公開レベル」「保管形式」「保管場所」については記入しないこと。
注2)　ドロップダウンリストから該当する項目を選択すること。
注3)　該当する項目の□をクリックし、チェックを入れる。

備　考



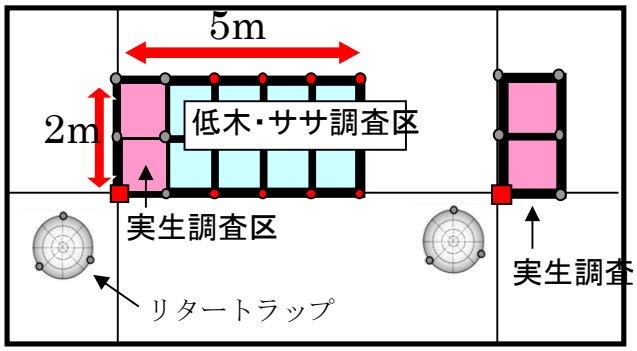
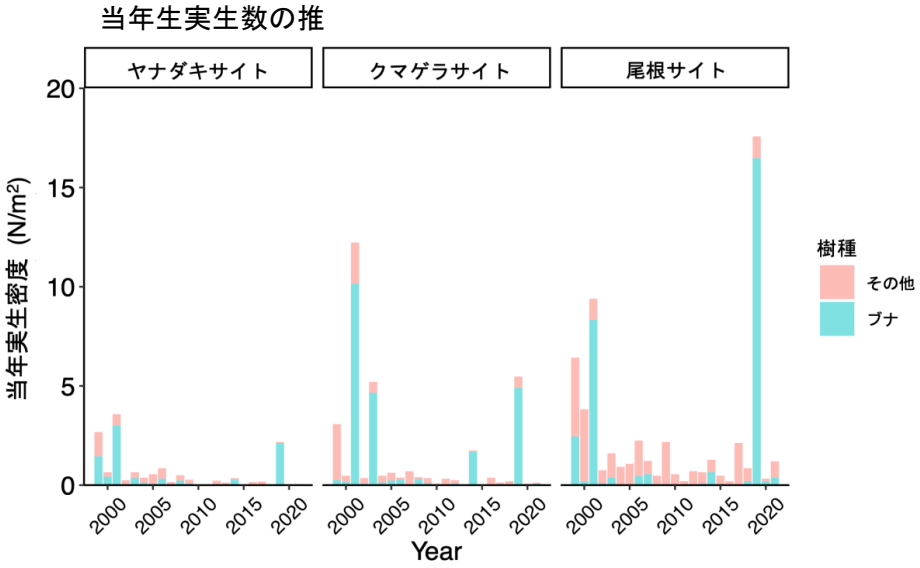
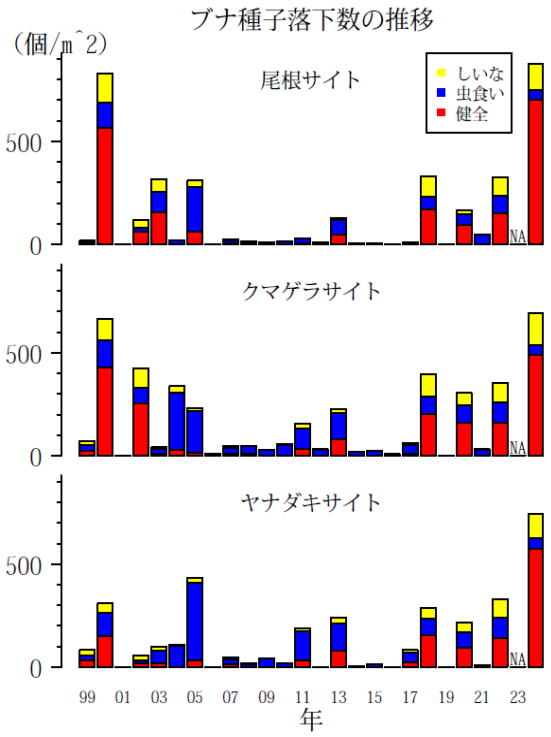



図. コドラート概要図